

農林水産業システムの概要

氷見における定置網漁業の歴史は古く、その記録は400年以上前に遡る。先人たちは定置網漁業に適した沿岸海域を活かして数多くの定置網を敷設し、そこから水揚げされる魚で生計を立て、地域の社会・経済・文化を支え、育みながら暮らしてきた。現在も豊かな海洋資源をもたらす氷見の定置網漁業が、地域に果たす役割は大きく、農業や林業、文化、環境保全の営みなどとともにあるのが「氷見の持続可能な定置網漁業」（以下、「当システム」）である。

水産資源の持続的利用に適した当システムの推進

定置網漁業は、網の入口が常に開いており一度入った魚が逃げ出せることや、魚が定置網の網などに産卵し稚魚が育つなど、資源保護や生物多様性に寄与する持続可能な漁業である。氷見の定置網漁業は、地域住民に雇用の場や収益を配分することにより、地域経済を発展させてきた。また、先人たちが、改良を重ね発展してきた氷見の定置網技術は、出稼ぎ漁などにより全国に伝播し、全国の定置網漁業のモデルとなっている。現在は、海外からの研修生の受入などの国際協力を通じて、定置網の技術と運営方法の海外への普及活動を推進している。当システムの国際的な普及は、SDGsの目標である「持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する」の達成にも寄与することが期待できるものである。

当システムによる地域経済の保障

約20kmの氷見の沿岸海域には29基の定置網が敷設されており、氷見における定置網の敷設密度は、他の地域と比較しても明らかに高い。これは氷見沖の優れた漁場を活かし、地域ごとに地先に定置網を敷設し、地域の食料、雇用を守ってきた証である。定置網漁業による漁獲量は、氷見全体の漁獲量の約9割を占め、基幹的な漁業となっている。定置網漁業により、水揚げされた鮮度・品質の優れた魚は、地域の水産加工業にも利用され、付加価値を向上させることで粗付加価値額約18.1億円を生み出し、氷見の経済を支えている。また、新鮮な魚料理を目玉にする旅館や民宿なども多く、近年は、氷見の魚を求め市外からも大勢の方が訪れている。

農山漁村の結びつきによって形成された景観と文化

氷見の定置網漁業は、農林業と強い相互関係がある。昔から定置網の材料として藁や杉、竹などが利用され、その定置網で捕れた大量のイワシは肥料として陸域で使用されてきた。また、県内の約97%を占める魚つき保安林は、森林が豊かな漁場形成に重要な役割を果たしていることを住民が認識し守ってきた。現在は、定置網漁業と農林業の関係は変わりつつも、漁業者による植林活動を通じて、海岸近くまで森があり、農業者によるため池・水路の整備や管理、環境保全の取組を通じて、栄養塩類の豊富な水が海域まで流れることにより、陸域と海域のつながりが維持されている。定置網漁業は、地域の結束や豊漁を願う地域の信仰だけでなく、「こんか漬け^{*1}」や「ぶり大根」、「嫁ぶり^{*2}」など地域の食文化や風習をも育み、今も息づいている。

*1 イワシやサバの糠漬。氷見の伝統的な保存食

*2 結婚した年のお歳暮に、お嫁さんの実家から嫁ぎ先へ、上等な寒ブリを丸々一本贈る風習